口語英語と学校英文法の実例から見る話題話題化と左方転移

Topic-topicalization and Left Dislocation in Colloquial English and School Grammar

杉浦理泰[1]，飯田泰弘[2]

SUGIURA Tadayasu[1], IIDA Yasuhiro[2]

［キーワード Keyword］　話題話題化，左方転移，口語英語，学校英文法，文末焦点の原則

［所　　属 Institution］　[1]岐阜大学大学院（Graduate School of Education, Gifu University），[2]岐阜大学教育学部（Faculty of Education, Gifu University）

［要　　旨 Abstract］　本稿は、談話が関わる統語操作である話題話題化と左方転移に関して、口語英語で見られる実例を示しながら、学校英文法に導入する意義について考察を行うものである。英語において、語順は非常に重要となるが、疑問文などの文の種類を変える義務的なものだけでなく、談話の状況に応じて任意で語順を操作する現象が存在する。話題話題化や左方転移と呼ばれるものがその一例であるが、どちらも学校英文法では指導されない場合が多い。これらの現象は周辺的な現象であり、頻出するようなものではないと思われがちだが、事実として、テレビやラジオ、映画などのメディアで確認できる現象である。また、自然な談話の形成や文脈判断において、この２つの現象は英語学習者の手助けとなる。そこで本稿では、テレビやラジオ、映画で見ることができる話題話題化と左方転移を提示し、高度な英文法書のみに記載されるような現象ではないことを示す。また、学校英文法の導入にあたり、参考書への記載の参考として専門書の記載や基本語順を意識させた解説の導入方法を提示する。

1.　はじめに

英語の文の基本語順は、次に示すように、文頭を主語に置くものである。

(1)　a.　You can play soccer.
　　b.　Tom gave the book to Mary.

(1a)は「あなたはサッカーができる」という意味となり、(1b)は「Tom はその本を Mary にあげた」という意味となる。しかし、次のような英語では、文頭に主語が来ない文も認められる。

(2)　a.　***Can*** you play soccer?
　　b.　***The book***, Tom gave to Mary.

(2a)のような助動詞が文頭に現れる現象を主語助動詞倒置と呼び、(2b)のような文中の目的語などが文頭に現れる現象を話題話題化と呼ぶ。(2a)は「あなたはサッカーができますか」という意味になり、(2b)では「その本については、Tom が Mary にあげたのだ」という意味になる。英語ではこのような語順を入れ替える現象が見られ、語順の入れ替えは大きく２種類ある。１つ目は、(2a)のような疑問文で見られる義務的な語順の入れ替えであり、２つ目は、(2b)のような随意的な語順の入れ替えである。(2a)と(2b)を比較すると分かるように、義務的な語順の入れ替えは文の機能や意味を大きく変えるのに対して、随意的な語順の入れ替えでは、論理的な意味は変わらない。このようなことから学校英文法では、前者のような義務的な移動は中学校などの早い段階で指導されるが、後者のようなタイプの移動が取り上げられることはほぼ皆無である。しかし、このような移動が起きることは、自然な談話を形成する上で非常に重要な役割を持ち、学習者のコミュニケーション能力の育成に大きく貢献すると考える。また、次に示すような話題話題化に類似した英語の文も存在する。

(3)　***The book***, Tom gave <u>it</u> to Mary.

(3)は左方転移と呼ばれる現象であるが、話題話題化と同様に目的語位置の要素が文頭に現れている。しかし、話題話題化とは異なり、文中の目的語位置に代名詞 it が現れている。この左方転移も話題話題化と同様に自然な談話の形成を促す役割を持つが、細かな部分で異なる機能を持つことが報告されている(e.g. 福地 1985)。そこで本稿では、(2)や(3)で示した話題話題化と左方転移のような重要な英語の文のタイプが、学校英文法ではほぼ触れられていない事実をまず確認し、そのうえで、このような談話と密接に関わる文タイプを学校英文法で示せば、日本の英語学習者のより深い英語の理解を手助けすることを提示する。まず、2 節では、話題話題化と左方転移が持つ機能に関して、先行研究を基に示す。3 節では、実際にこれらの現象が、高度な英文法書のみに記載されるような特異なものではなく、むしろ口語英語で実際に頻繁に観察されることを、ラジオやテレビ番組、映画などのメディアから採取したデータを用いて提示する。4 節では、学校英文法ではあまりこれらの現象が取り扱われていないことを学習指導要領や高校生向けの学習参考書を用いて指摘する。5 節では、話題話題化と左方転移を学校英文法で扱う重要性について述べる。6 節では、これらの現象をどのように学校英文法で扱うかの一例を提案する。7 節でまとめを行う。

2.　話題話題化と左方転移の基本的な機能

本節では、話題話題化と左方転移に関して、情報構造の観点から、それぞれが見せる談話における機能を確認する。

発話において、伝達される情報は、大きく旧情報と新情報に分類することができる。旧情報は、発話の際に話し手と聞き手が共有しているとみなされるものであるのに対して、新情報は、発話の際に話し手と聞き手が共有できていない情報を指す。この時、旧情報は発話の話題の機能を、新情報は発話の焦点となる傾向がある。[1] 加賀・大橋(2017: 243)が示した、次の英語の対話を見てみよう。

(4)　A:　What happened to <u>the table</u>?
　　B:　<u>The table</u> ***was painted by John***.

(4)の会話は、「このテーブルどうしたの」という問いかけに対して、「このテーブルは、John によって塗られたのだ」と受動態で答えている。これは、A の発話でテーブルに関して述べられていることから、B の発話の段階でテーブルが旧情報となる。よって文頭に the table を置くことで was painted by John という新情報の部分に焦点を当てることができる。このように、英語では旧情報を文頭に置き、新情報や焦点要素を文末に置く傾向がある。これは情報の流れとして、聞き手にとって既に共有されている旧情報を先に提示し、それを足がかりとして、聞き手に共有されていない新情報が追加されるのが自然だからである。つまり、(4)の B の発言は、能動態で John painted the table.とするよりも、情報の流れがスムーズになるのである。

このように、「旧情報→新情報」の流れを文末焦点の原則と呼ぶが、(2b)や(3)で見た話題話題化と左方転移は、この文末焦点の原則に基づいた現象である。次に示す福地（1985: 75, 80）で提示された会話文を見てみよう。

(5)　a.　A:　What do you take on ***hotdogs***?
　　B:　***Hotdogs*** I eat with mustard.
　　b.　A:　What happened to ***Tom***?
　　B:　***His car***, <u>it</u> broke down, and he depressed.

(5a)は「ホットドッグに何を付ける？」という問いに関して「マスタードをつける」と返答しているが、この

[1] ここで注意しなければいけないのは、話題と焦点は常に対比の関係にあるわけではないということである。厳密にいうと、話題は評言、焦点は前提と呼ばれるものがそれぞれの対概念となる(e.g. 加賀・大橋 2017)。

時に話題話題化が見られる。これは「ホットドッグ」という情報が問いかけの中で出ていることから、両者が共有している情報であり、旧情報である。よって、hotdogs を文頭に置くことで hotdogs を話題として際立たせ、「マスタードをつける」という情報に焦点を当てることができる。また、(5b)では Tom に関する問いかけがあった後に、「車が故障した」という返答が見られる。この時、「彼(Tom)の車」が文頭に現れているが、ここで彼、すなわち Tom の存在は、問いかけに見られる情報であることにより旧情報である。[2] そのため、Tom の要素が含まれる his car を文頭に置くことで、「彼の車が壊れた」ということに焦点を当てることが可能となる。

このように、話題話題化と左方転移は旧情報が文頭に現れるが、文中に着目すると、文頭に現れた要素の元位置に差が見られる。(5a)では文頭の hotdog が元位置である eat の目的語位置に見られないのに対して、(5b)では、his car の元位置である主語位置に代名詞 it が現れている。話題話題化では、文頭に現れる要素は文中の元位置から文頭へ移動すると分析されるのに対して、左方転移では、移動は見られず、要素は文頭の位置に基底生成され、代名詞が元位置に現れると分析される(e.g. 福地 1985)。この元位置に文頭の要素に対応する代名詞が現れるかどうかで、機能に差が現れる。(5)の対話を比較すると、(5a)では直前の話題である hotdogs がそのまま文頭に現れているため、話題として hotdogs を引き継いでいる。それに対して、(5b)では his car が現れており、厳密に言えば、直前の問いかけの話題である Tom の話ではなくなっている。加賀・大橋 (2017)等、多くの先行研究で話題話題化は、直前の話題をそのまま引き継ぐのに対して、左方転移では、新たな話題導入としての役割を持つと指摘している。この時の話題転換は、全く新しい話題を導入するのではなく、直前の話題から派生できるものでないといけない(e.g. 福地 1985)。実際に(5b)では、his car という話題に変化しているが、直前の話題である Tom から派生していることが分かる。

以上が話題話題化、左方転移に関する情報構造の観点から見た機能である。どちらも談話上の旧情報を主語の前に置き、後ろに焦点要素として新情報を導く文末焦点の原則に従った現象である。しかし、話題話題化では、前の話題を引き継ぐ機能があるのに対して、左方転移では、新たな話題を導入する機能があるということで差が見られる。次節以降で、話題話題化と左方転移に関して、それぞれが持つ機能を基に口語英語の実例、および学校英文法での取り扱われ方について見ていく。

3.　口語英語で見られる話題話題化と左方転移

前節では、自然な談話を促す効果を持つ話題話題化と左方転移に関して、それぞれが持つ機能について述べた。本節では、話題話題化と左方転移が実際に口語英語の中でも見られることを、テレビやラジオ、あるいは映画の実例を示しながら、前節で見た機能が見られることを確認し、これら 2 つの現象が高度な英文法書のみに記載されるような、稀なものではないことを指摘する。

3.1.　話題話題化

まずは話題話題化が見られる実例において、前節で示した談話を引き継ぐ機能を果たしているか見ていく。次の文を見てみよう。

(6)　a.　The referee's let two or three bad tackles go, but ***that one***, he wasn't happy with.
(Gerry Armstrong, Sky Sport TV)

b.　Nigel: Who's that?
Emily: ***That***, I can't even talk about.　<00:05:00> (*The Devil Wears Prada*, 2006)

(6a)は、Radford (2018) が実際にテレビ番組から採集したデータである。ここでは、but 以降の文において、with の目的語である the one が文頭に現れているため、話題話題化が見られる。先行文脈として、but より前に「審判がファールを見逃した」という情報が聞き手と話者の間で共有されている。よってファールを見逃

[2] 左方転移では、(5)で示したように、主語位置の要素も話題として現れることがある(e.g. 福地 1985)。

したことを示す that one を文頭に移動させることで、ファールを見逃したことに対して「選手が不満を持っている」という部分が焦点部分となる。(6b)は映画のワンシーンである。ここでは「これ、誰？」という問いかけに対して「その人なら、話している暇はないわ」という Emily の返答で話題話題化が見られる。こちらも(6a)と同様に that(主人公)に関する言及が一貫していることから、話題が継続していることが分かる。これにより「主人公を紹介している時間はないから無視して」ということを焦点化している。上記のような例から、口語英語でも話題話題化は確認することが可能である。

また、話題話題化は、次に示すような焦点部分を他の現象と併用することで、より際立たせるような例もみられる。

(7)　You two aren't going to argue about that. ***That much***, I do know.　　(David Gower, Sky Sports TV)

(7)も(6a)と同様に Radford (2018)に示されたラジオからの実例である。まず、先行文脈として「あなた達はそれに関して言い争いはしないだろう」という発言の後に「それだけは分かる」ということを述べており、ここでは that much は直前の内容を示している。よって先行文脈の内容を引き継ぐ話題話題化が起きていることが分かるが、ここで話題話題化の焦点部分を見ると、助動詞 do が挿入されていることが分かる。この助動詞 do は動作を強調する効果がある。ここから、that much が指す内容を本当に知っているということを強調させることができ、主語以降の内容をより一層際立たせることができる。

3.2.　左方転移

左方転移の実例が話題の転換としての機能を果たしているか見てみよう。左方転移が見られる実例として、下の映画の例を示す。

(8)　a.　Spiderman is all but invincible, but ***Parker***, we can destroy him.　　<01:29:53> (*Spider-Man,* 2002)
　　b.　Oh, and by the way, ***the suit***, it wasn't cheap.　　<00:23:43> (*The Dark Knight*, 2008)

(8)はどちらも文中に、節の文頭に現れた要素が代名詞として現れていることから、左方転移が起きていることが分かる。(8a)は、悪役がヒーローである Spiderman をどのように倒すか話し合うシーンであるが、but 以降に左方転移が起きている。例文全体の解釈は、「Spiderman を打ち負かすのは難しいが、Parker (Spiderman の正体)なら粉々にしてやれるさ」となる。この時、Spiderman と Parker が同一人物であることが聞き手と話者の中で共有されていることから、Parker は旧情報となり、話題としてのはたらきを持つ。その結果、「Parker なら粉々にできる」ということに焦点を当てる。また、このとき話題が Spiderman から Parker に切り替わっていることから、左方転移の機能として確認した話題の導入が見られ、「Spiderman の時ではなく変身する前の Parker の時に倒そう」という事を提案していることが分かる。(8b)は *The Dark Knighted* で見られる発言であり、ここで it wasn't cheap は文頭の the suit (主人公が来ているスーツ)に対する言及となっている。ここでは、直前に by the way という話題転換のためにフレーズが用いられていることから、話題転換が起きたことが、この一文からも容易に推測できる。このように、左方転移は、前節で見たような話題転換としての役割があることは十分に分かるだろう。

しかし、次に示すように、話題転換だけではなく、発言が何に対しての言及なのか分かりやすくするために左方転移を行う例も見ることができる。

(9)　***The championship***, one of the greatest things about that league is that it's the most unpredictable league around.[3]　　(Listener, BBC Radio)

(9)は Radford (2018)で示されたラジオから採集された例である。解釈は「チャンピオンシップに関して、そのリーグが素晴らしい点の 1 つは(どのチームが優勝するか)予測不能であることだ」であるが、話題が主語

[3] EFLチャンピオンシップ。イングランドサッカーリーグの2部リーグを示す。

に埋め込まれているため、文頭に the championship と置くことで、チャンピオンシップに関する話題であることを聞き手に明確に示すことができる。これにより、主語以降の「チャンピオンシップの素晴らしい点が予測不能なリーグである」ことに焦点を置きやすくなるのである。

4.　学校英文法における話題話題化と左方転移

本節では、日常の口語英語の中でも観察される話題話題化や左方転移が、学校英語ではほとんど取り扱われないことを、学習指導要領や高校生向けの学習参考書の記載から指摘する。

まず学習指導要領に関しては、どの教育課程においても話題話題化や左方転移の指導に関する記載は見ることができない。文構造に関する記載は「主語+動詞+目的語」などの、学校英文法でいうところの 5 文型や疑問文の語順の指導が中心であり、自然な談話を促す特殊な文や語順の変化に関する指導はほとんど見られない。[4] これに関しては、基本語順の定着や、Wh 疑問文における Wh 句の文頭への移動など、義務的な統語操作を求める文の理解が最優先にされていることが考えられる。また、情報構造に関する記載も見られない。

次に、学習参考書での記載に関してだが、ほとんどの学習参考書において、自然な談話を促す特殊な文や語順の変化に関する記載は見られるが、本稿で取り上げている話題話題化や左方転移に関しては触れられていない。その一方で、文末焦点の原則などの情報構造の記載が見られるものもある。その一例として、『Vision Quest 総合英語』と『総合英語 Evergreen』を取り上げ、自然な談話を促す特殊な文や語順の変化に関する記載がどのように見られるか確認しよう。

まず、『Vision Quest 総合英語』では、特殊な語順として、場所句倒置、否定倒置や「it is … that」の強調構文等が取り扱われている。情報構造に関して、135 ページに次のような記載が見られる。

(10) 英語の文をつくるとき、相手が全く知らない事柄から始めるより，すでに相手が知っている事柄から始めるほうが，相手は理解しやすい。そのため，英語には，**相手が知っていることから相手が知らないことへ**という流れで文を書くという原則がある。相手がまだ知らない情報というのは情報価値が高く，重要な情報であるので，**情報価値の高い情報(=重要な情報)が文の後ろにくる**ことになる。

(10)は受動態のセクションの最後に見ることができる記載である。(10)に従った現象として、受動態、There 構文、倒置、与格交替が挙げられているが、話題話題化や左方転移の記載は見られない。

『総合英語 Evergreen』でも、特殊な語順として、場所句倒置、否定倒置、「it is … that」の強調構文等の記載が見られる。そして、これらの現象が起きる理由として、464 ページで次のように記載している。

(11) a.　基本的には文頭に来るのが題目(トピック)であり，その後に，新しく話に登場する事柄が出てくる(→p.269)。英語で語順を変える時の基本原則は次の 2 つである。

b.　驚かせてから話を進めるために文頭を強調したり，おいしいネタを最後までとっておくために文末に重要な要素をまわしたりする。

(11)は倒置に関するセクションで確認できるものであり、(11a)で参照されている 269 ページでは、情報構造に関する説明が見られる。また、(11b)は、(11a)の基本原則のうちの 1 つである。[5] また、475 ページで次のような目的語が文頭に現れる例文が記載されている。

(12) Spaghetti I like, but **macaroni** *I dislike*.

---

[4] 特殊な語順としてはthere構文、重名詞句移動を伴う構文などの記載が見られる。

[5] もう1つはリズムに関する記載である。

(12)は「スパゲッティは好きだが，マカロニは嫌いだ」という訳が当てられている。一見すると、ここで見られる現象は話題話題化のように見られる。しかし、この現象は話題話題化ではない。ここで文頭に現れている spaghetti と macaroni は、2 節などで確認した話題としてのはたらきではなく、好きな物と嫌いな物の対比させる役割を担うことから、むしろ焦点要素である。談話が関わる語順の入れ替えは、本稿で見てきた話題話題化とは別に、焦点話題化と呼ばれるものがあり、(12)はこの焦点話題化が起きている。[6] このようなことから話題話題化の記載は直接的に見られないことが分かる。以上が『総合英語 Evergreen』の記載方法である。

5.　話題話題化、左方転移を学校英文法に導入する意義

前節で見た通り、学校英文法では、話題話題化や左方転移は取り扱われていない。しかし、これらの現象を学校英文法においても紹介すれば、日本の英語学習者が、英語をさらに深く理解する助けとなると考えられる。本節では、話題話題化と左方転移を学校英文法へ導入する意義について 3 つの根拠を基に示す。

1 つ目は、3 節で見たように、話題話題化と左方転移はテレビ番組や映画などの、比較的身近な口語英語で耳にすることができる点である。次の例も、映画やラジオで確認された英語である。

(13) a.　Stan:　I reckon you've heard of him.
　　Harry:　Yeah, ***Him*** I've heard of.　　<00:11:34> (*Harry Potter and the Prisoner of Azkaban*, 2004)
　b.　***These footballers***, there're a level of education that <u>they</u> require.　　(Sean Udall, BBC Radio 5)

どちらも最初に見た(1)のような主語から始まる文ではないことは明確である。(13a)の話題話題化では、目的格の him が文頭に出ていることから、特殊な語順を知らない学習者は文の解釈が上手くいかない可能性が高い。(13b)も同様に，文頭の these footballers が従属節の they と同じものを示すことは、左方転移がどのようなものかを理解していてこそ、正確に判断できるものである。

話題話題化と左方転移を導入する根拠の 2 つ目は、これらの理解は、実際に例文に出会った時に役立つだけでなく、英語の文章構成や自然な談話がどのようなものかという理解につながることが挙げられる。すでに指摘したように、話題話題化や左方転移は文末焦点の原則に基づいた現象である。旧情報を述べた後に新情報、焦点要素を述べる構造は、文脈全体に一貫した繋がりを形成することから、聞き手も理解しやすい(e.g. 加賀・大橋 2017)。話題話題化や左方転移は「旧情報→新情報」が明示的であることから、情報構造を理解しやすいと考えられる。

話題話題化と左方転移を導入する最後の根拠は、話題話題化や左方転移は、通常の語順で表した文とは異なり、否定辞と数量詞が生む曖昧性を除去することができる場合がある。次の例文を見てみよう。

(14) a.　I haven't read all of these books.
　b.　***All of these books***, I haven't read.

上記の文は久野・高見（2007: 63）が示した例文であるが、(14a)のような通常の語順の場合、「私はこれらの本の全てを読んでいない」という解釈と「私はこれらの本をすべて読んだわけではない」という、全体否定と部分否定のいずれの解釈を生むと言われている。しかし、話題話題化を起こした(14b)では、全体否定の解釈しか生まないという。これは all of these books が文頭に現れたことで文中の not の影響を受けなくなり、not の影響が動詞 read にのみ現れる状況となったためである。このように、談話が関わる語順の入れ替えを行うことで、複数ある解釈を 1 つにすることができる場合がある。

このような事実を知れば、日本の英語学習者にとっても、語順の違いが相手に伝えようとする意味内容に

---

[6] 話題話題化と焦点話題化は、統語的観点、情報構造の観点でかなり差が見られることから、別の現象であることが言われている(e.g. 福地 1985)。

違いを生むことを知る、良い機会になるはずである。

6.　話題話題化と左方転移の学校英文法での導入

前節で見た通り、学校英文法に話題話題化と左方転移を導入することは、学習者の英語における自然な談話の流れに対する理解を深めることに繋がる。本節では、これら 2 つの現象の取り入れ方に関して 2 つの試案を示す。

6.1.　北村(2019)を参考にした学習参考書への記載

前節で見たように、話題話題化と左方転移に関する記載は学習参考書では見られない。学習参考書に話題話題化と左方転移を記載する一例として、本稿では北村(2019)を参考にしたい。次の例文は北村(2019)で見られる話題話題化や左方転移の例文である。

(15) a.　As a result, some interesting changes occurred. But ***these*** I will leave for another chapter.
（北村 2019: 57）

b.　***His students***, <u>they</u> are deeply interested in foreign cultures.　（北村 2019: 206）

(15a)の話題話題化が見られる例文に対して北村(2019)は、OSV の語順の場合、O の部分は聞き手にとって SV よりもアクセスしやすい情報でなくてはならないとし、O が旧情報である必要性を述べている。訳に関しても、「結果として、いくつかの面白い変化が生じた。しかしこれは別の章で扱うことにしよう」と示しており、目的語である these を「これは」と解釈することで、例文がある章で取り扱っている問題と対比させる効果を生むという。これにより「別の章で扱う」ことを焦点化することができ、英文のニュアンスを崩さないということを述べている。一方で、(15b)は左方転移が見られる例文であるが、これは they が何を指すが明確にするために his students が文頭に現れている。北村(2019)では、この his students は直後の they がどのようなものを示すか明確にするはたらきがあると説明している。ここから、his students は、文全体が何に対する言及かを明示的にする機能を持ち、(9)で見た the championship と同じはたらきを持つことが推測できる。また、訳に関しても、「彼の学生だが、彼らは海外の文化に深い関心がある」と、これも(15a)の時と同様に英文の意図に忠実な形で示されている。この北村(2019)のような記載方法を学習参考書でも採用すれば、たとえ高校生レベルであったとしても、話題話題化や左方転移の現象の理解のきっかけ作りになることが期待される。

6.2.　基本文型との比較

話題話題化と左方転移は、3 節で見たように口語英語で確認できるものであるが、これらの現象ばかりに目を向けることは、基本語順がおろそかになったり、英語の語順に関して不必要な混乱を招いたりする可能性もある。基本文型を理解していないと、本当の意味で話題話題化や左方転移を使いこなすことは困難である。そのため、ただ学習参考書に記載するだけではなく、話題話題化と左方転移が持つ機能をより深く理解できるよう、基本文型との違いを意識させながら、文法解説を行うことが重要だと考える。

まず、基本文型と話題話題化の比較を行う際は、次のような例文を用いて比較をさせるのが効果的だろう。

(16) a.　I like sushi.

b.　***Sushi***, I like.

例文は、語順の入れ替えが明快になるように、(16a)のように第 3 文型であり、かつ、主語や目的語への修飾語句を極力取り除いたものが、英語学習者に示すものとして望ましいと考える。しかし、ここで重要なのは、(16)の 2 文を比べさせる前に、(17a, b)のような形で英文を先に確認することだと考える。そうすれば、(16b)のような話題話題化が起こる前の語順などが、分かりやすくなると考えられる。

(17) a. [　　] I like sushi.
　　b. ***Sushi***, I like [　　].

(17)のように空白を視覚的に捉えられるように示すことで、２つの文の語順をそろえることができる。これにより、目的語位置の sushi が文頭に現れたということを明示的にすることができる。よって学習者は、(17b)の文頭の sushi が like の目的語であり、(17b)は OSV の構造であるということが容易に想像することができる。さらに、空白を用いて SVO と OSV の語順の違いを明示的に示した後は、その日本語訳にも注意を向けさせることが大事である。すなわち、目的語が文頭に現れたときは、基本語順の訳が「私は寿司が好きだ」というのに対して、「寿司だったら、私は好きだ」と、異なる訳を示すということである。そうすれば、学習者は日本語の訳し方の違いからも、語順が変わればその意味解釈にも影響が出ることに気付くことができ、話題話題化の機能に関する理解に繋げることができると考えられる。

左方転移を基本文型と比較させる際も、話題話題化の時と同様に、修飾語句がない第３文型を用いる。

(18) a. I like sushi.
　　b. ***Sushi***, I like it.

話題話題化の時とは異なり、左方転移は文頭に目的語が現れるだけではなく、目的語には代名詞 it が現れる。そのため、左方転移では、(17)の話題話題化のように空白を用いて語順をそろえることに加え、文頭に現れる要素が文中の目的語と同じであることを線で結ぶことで示す。

(19) a. [　　] I like sushi.
　　b. ***Sushi***, I like　it.

(19)のように、左方転移により文頭に挿入された話題は、文中の目的語と同じものを示すことを明示化することで、学習者は語順に着目するようになると考えられる。また、左方転移に関しては、「～に関して言えば」を意味する as for とほぼ同等の意味とされることもあるので、次のような as for と合わせて指導することも有効であると考えられる。

(20) ***(As for) sushi***, I like it.

as for を加えることで、「寿司に関して言えば、私はそれが好きです」と、文頭の要素が話題を導入する役割を持つことをより明示的に説明することが可能となる。

このように、話題話題化と左方転移を空白や線を用いながら基本語順と対比させることで、語順の差に着目させることができると考えられる。この説明をした状態で、3 節で見たような実例を前後の文脈と一緒に提示すれば、情報構造の観点から見た話題話題化と左方転移の機能に対する理解が深まると考えられる。しかし、この指導は基本文型との比較を前提にしていることから、基本文型である 5 文型をきちんと理解していないと比較させることができない。よって、小学生や中学生レベルの学習者に対しては、(1)で見たような「主語＋動詞」などの基本文型や、(2a)で見たような義務的な語順の入れ替えの指導で留めておき、ある程度の英語の基本的な知識が備わった高等学校レベルにおいて、学習者に対する話題話題化や左方転移の紹介を行うことが適切であると考えられる。

6.3.　提示する例文における注意点

前節で、基本文型と話題話題化、左方転移を比較させる文法解説の導入として、修飾語句のない第３文型が望ましいということを述べた。これは、余計な付属要素があれば、かえって学習者の語順に関する混乱を招く可能性があるためである。例えば、次のような例文である。

(21) a. ***To John***, I gave a book. （加賀・大橋 2017: 245）
b. ***A bran muffin*** I can give you. （Huddleston & Pullum 2002: 1373）

(21a)は与格構文で見られる話題話題化であるが、to John のような「前置詞＋名詞」が話題として文頭に現れる話題話題化も見られる。しかし、この「前置詞+名詞」は目的語ではないため、前節で見たような文型に当てはめた場合、主語以降が第３文型と同じ SVO となる。また、(21b)は二重目的語構文で見られる話題話題化であるが、間接目的語が文頭に現れている。二重目的語構文は SVOO の第４文型で示されるが、話題話題化の時の語順は OSVO となる。この時、文頭に現れた、目的語は直接目的語なのか間接目的語なのかが判断が困難である。よって、(21)のような与格構文や二重目的語構文などで見られる話題話題化の提示は、学習者にとって、元の語順と文型が変わらなかったり、直接目的語と間接目的語のどちらが文頭に現れたのか判断が困難であったりと混乱を招く可能性がある。このような混乱を避けるために、修飾語句のない第３文型を導入として提示することが妥当であると考えられる。

7. おわりに

本稿では、話題話題化と左方転移に関して、口語英語に現れる実例を見ながら、学校英文法で取り扱うことの重要性や、その指導方法の案を議論した。話題話題化と左方転移は、文末焦点の原則に基づいた現象であることから、自然な談話の形成において重要な役割を持つ。そのため、これらの文の理解を促すことは、学習者が英語における自然な談話がどのようなものかを理解する一助になりえる。

今後の展開として、本稿では 6.3 節で少し触れたものの、深い議論ができなかった与格構文や二重目的語構文での、話題話題化や左方転移の現象を、どのように学習者に提示するかも考えたい。また、自然な談話を促す特殊構文には、場所句倒置と呼ばれるものや、(12)で見たような焦点話題化など、様々なものがある。これらも学校英文法で触れられることはあまりない言語現象であるため、指導に関する議論を行いたい。

引用文献

澳タカユキ（編）. (2017). 『総合英語 Evergreen』. 東京: いいずな書店.
加賀信広・大橋一人（編）. (2017). 『授業力アップのための一歩進んだ英文法』. 東京: 開拓社.
北村一真. (2019). 『英文解体新書　構造と論理を読み解く英文解釈』. 東京: 研究社.
久野暲・高見健一. (2007). 『謎解きの英文法　否定』. 東京: くろしお出版.
倉田誠（編）. (2011). 『映画で学ぶ英語学』. 東京: くろしお出版.
野村恵造（監修）. (2013). 『Vision Quest 総合英語』. 大阪. 啓林館.
福地肇. (1985). 『談話の構造』. 東京: 大修館書店.
Huddleston, Rodney & Geoffrey K. Pullum. (2002). *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press. [『情報構造と照応表現』. 畠山雄二（編）. 2020. 東京: 開拓社.]
文部科学省. (2019). 『高等学校学習指導要領(平成 30 年告示)解説　外国語編　英語編』. 東京: 開隆堂.

映画

Cuarón, Alfonso. (2004). *Harry Potter and the Prisoner of Azkaban* [Motion picture]. United Kingdom, United States: Warner Bros.
Frankel, David. (2006). *The Devil Wears Prada* [Motion picture]. United States, France: Fox 2000 Pictures.
Nolan, Jonathan. (2008). *The Dark Knight* [Motion picture]. United States, United Kingdom: Warner Bros.
Raimi, Sam. (2002). *Spider-Man* [Motion picture]. United States: Columbia Pictures.